ボージャとダルマキールティ

本　田　義　央

0．ボージャ(Bhoja, 11c)の著した詩論書*Śṛṅgāraprakāśa*に、仏教論理学者ダルマキールティ(Dharmakīrti, 7c.)の著作からの引用あるいはダルマキールティへの言及が四箇所あることは既にRaghavan(1978, 741)によって指摘されている。それらのうち、本稿では、*Śṛṅgāraprakāśa*第7章および第9章における「少年は火だ」というような比喩表現についての語の意味の一次性・二次性をめぐる議論のなかに、若干の変更をくわえて引用される*Pramāṇavārttika* 3(Pratyakṣa). 37をとりあげる[1)]。この詩節は、ボージャの自説の根拠として引かれるのだが、本稿において問題としたいのは、なぜボージャがここにダルマキールティの詩節を引くのか、という点である。すなわち、詩論書*Śṛṅgāraprakāśa*において、比喩表現は、その中核ともいうべき重要な問題であるはずである。そこになぜあえて仏教徒ダルマキールティの詩節を引いて説明しなければならなかったのだろうか。

1．まずはじめに、ダルマキールティの詩節そのものをその文脈とあわせてみておこう。

PV 3.37: yatra rūḍhyāsadartho 'pi janaiḥ śabdo niveśitaḥ /
sa mukhyas tatra tatsāmyād gauṇo 'nyatra skhaladgatiḥ //

語は非実在(asat)を対象とするものであっても慣用にしたがって人々によってある［対象(甲)］に対して適用される。そ［の対象(甲)］に関して、そ［の語］は一次的(mukhya)［な語］である。［一方、］そ［の対象(甲)］との類似性にもとづいて、［語が、対象(甲)とは］別の［対象(乙)］において歩みを躓かせるとき［すなわち他の対象を理解させるとき］、［その語は］二

次的(gauṇa)［な語］である[2)]。

この詩節は、語とその意味の一次性と二次性についてのダルマキールティの見解をのべたものである。ダルマキールティは、語の表示対象である一般相(sāmānya)が実在(vastu)ではない、ということを*Pramāṇavārttika* 3.11-50で、種々の根拠にもとづいて論じている。ダルマキールティをはじめとする仏教論理学者たちにとって、言葉の表示対象である一般相は「他者の排除」(anyāpoha)であり、それは無自性である(PV 3.30)。一般相を仮に実在と考えると、語は過去のもの未来のものをともに表示しうるから、過去や未来の既に滅しているか未だ生じていない存在しないものに、実在としての一般相があるというおかしなことになってしまう(PV 3.34)。この難点を反論者は、実在を対象とする語は一次的であり、非実在を対象とする語は二次的、すなわち過去や未来の現在実在しないものにたいして語は比喩的に使用されている、として回避しようとする[3)]。しかし、ダルマキールティは語の一次性と二次性の根拠を対象の実在と非実在にもとめるそのような考えは認めない。一般相の実在を認めないダルマキールティにとって、一次的な語とはある対象に対して慣用にしたがって使用される語であり、その対象とは別のものに対して使用される語が二次的なのである。このことを述べたのが上記の詩節である。

2．*Śṛṅgāraprakāśa*では、上記のダルマキールティの詩節に若干の変更を加えたものが、まず第7章に次のようにボージャの自説の根拠として引かれる。

ŚP 7(353.5): tathā hi; gaur ity ayaṃ śabdo mukhyayā vṛttyā sāsnādimantam arthaṃ pratipādayti［/］sa eva tiṣṭhanmūtratādiguṇasampadam apekṣamāṇo yadā bāhīke vartate tadā gauṇīṃ vṛttim anubhavati / tad āha "rūḍhyā yatrāsadartho 'pi loke śabdo niveśitaḥ / sa mukhyas tatra tatsāmyād gauṇo 'nyatra skhaladgatiḥ //"

すなわち、「牛」(gauḥ)というこの語は、第一次表示機能(mukhyā vṛtti)に

よって喉袋等をもつ対象を知らしめる。その同じ語が、立ったまま用を足すこと(tiṣṭhanmūtratā)などという多くの属性をそなえていること(guṇasampad)に依存して、ヴァーヒーカ人を表示するとき、第二次表示機能を担う。したがって［次のように］いわれている。

「語は、非実在(asat)を対象とするものであっても、世間では慣用にしたがってある［対象(甲)］に対して適用される。そ［の対象(甲)］に関して、そ［の語］は一次的［な語］である。［一方、］そ［の対象(甲)］との類似性にもとづいて、［語が、対象(甲)とは］別の［対象(乙)］において歩みを躓かせるとき、［その語は］二次的［な語］である。」

ここでボージャは第一次表示機能(mukhyā vṛtti)と第二次表示機能(gauṇī vṛtti)について述べているが、問題点は同じである。ボージャの説明と引用詩節をあわせれば、次のように考えることが出来よう。「牛」という語は、喉袋などをもつある種の動物を表示することは慣用的によく知られている。その動物を表示する場合、「牛」という語は第一次表示機能によって一次的対象である動物を表示し、その語自体も一次的な意味をになうものとして一次的である。一方、「ヴァーヒーカ人は牛だ」というような比喩的な表現においては、喉袋などをもつ動物とヴァーヒーカ人との類似性にもとづいて、すなわち、ボージャによれば立ったまま用を足すことなどというヴァーヒーカ人にある牛と共通する属性にもとづいて、牛という動物とは別のヴァーヒーカ人を表示することになる。その場合にはたらく表示機能は第二次表示機能であり、二次的な意味を担うものとして、その語は二次的である。しかし、この箇所だけでは、ボージャが自説の根拠としてなぜここに仏教論理学者ダルマキールティの詩節をひかなければならないのかということははっきりしない。

3．ボージャは、*Śṛṅgāraprakāśa*第9章において、語の意味とそれをになう語の一次性と二次性の区別の根拠について、クマーリラの*Tantravārttika*とバルトリ

ハリの*Vākyapadīya*およびそれに対するVṛtti注を交互に引用しながら、あたかもクマーリラとバルトリハリとの対論を構成するかのようなかたちで論じている。その議論の冒頭で、まずボージャはクマーリラ説とバルトリハリ説の基本的な相違を提示する。まずはじめはクマーリラ説である[4)]。

しかし、間接表示機能(lakṣaṇā)と第二次表示機能(gauṇī)は同じだといってはならない。なぜなら、[クマーリラ] バッタが [つぎのように] 述べている。

「表示対象(abhidheya)と不可離の関係にあるもの(abhinābhūta)を知らしめるものが間接表示機能(lakṣaṇā)であると考えられる。一方、間接的に表示されるもの(lakṣyamāṇa)である属性(guṇa)との結び付きにもとづくとき、表示機能(vṛtti)は二次的なものと考えられる。」

クマーリラによれば、第一次表示機能(abhidhā)による表示対象(abhidheya)は、常に類(ākṛti/jāti)である。そして、その類との不可離の関係にある個物(vyakti)は、間接表示機能によって表示される。そして、第二次表示機能は、間接表示機能によって間接的に表示されたものである個物にある属性(guṇa)との結び付きにもとづいて語が使用される場合にその語が担う表示機能である。そして、「少年は火だ」などの比喩的な表現においては、この第二次表示機能がはたらくとされる。すなわち、ボージャは次のようにいう[5)]。

一方、二次的表示機能(gauṇī)の場合には、「子供は火だ」(agnir māṇavakaḥ)「デーヴァダッタはライオンだ」(siṃho devadattaḥ)「ヴァーヒーカ人は牛だ」(gaur vāhīkaḥ)などという場合に、子供(māṇavaka)などは、火性(agnitva)との不可離の関係にもとづいては、[「火」「ライオン」「牛」という語からは] 理解されない。そのような場合、どうなるのか。

「火性(agnitva)を特徴とする対象 [すなわち火] から赤色など [という属性] が理解される。[そして] 少年における、そ(赤色という属性)の点での

［火との］類似性(sādṛśya)にもとづいて、［「少年は火である」という］知がおこる。」

クマーリラによれば、「少年は火だ」という表現においても、「火」という語はやはり火性を表示する。そしてその「火」という語は、間接表示機能によって個物である火を表示する。そのようにして個物としての火が表示されるとき、その火にある赤色など種々の属性がさらに理解される。そして少年にも赤色という属性があり、火から理解された赤色という点で、少年には火との類似性(sādṛśya)が認められる。類似性をクマーリラは、「類X［に属すX'の］多数の部分［に内属する］普遍との結び付きが別の類Y［に属するものY'］にあること」[6]と説明する。目下の場合にあてはめれば、火という類に属する火には赤色という属性があり、それには赤色性という普遍が内属している。その赤色性という普遍との結び付きが少年の類に属す少年にあるということになる。そしてその類似性にもとづいて「少年は火だ」という知がおこるのである。したがって、クマーリラにおいては、赤色などという属性(guṇa)もしくはそれにもとづく類似性にもとづくことが表示対象および語の二次性の根拠である。この場合、'gauṇa'という語は、一次・二次の対立における二次性よりもむしろ、属性(guṇa)にもとづく、という意味を強く示している。

4．このクマーリラの説を、ボージャは*Vākyapadīya*に対するVṛtti注をほぼ引用して、次のように批判する[7]。

一方、ある場合には、［牛との］関係が一般によく知られている(rūḍhasambandha)行為や属性に対して「牛」という語が使用されることが知られている。たとえば、鈍さ(jāḍya)、あるいは不潔さ(aucchiṣṭya)、あるいは忍耐強さ(sarvasahatva)、あるいは大食(mahāśanatva)ゆえに、「ヴァーヒーカ人は牛だ」といわれる。したがって、以上のように、すべての能力を有する「牛」という語は、統語関係(artha)や文脈(prakaraṇa)等によってそ

の能力(sāmarthya)を制限される(avacchidyamāna)とき、大地などを表示するのと同じようにバーヒーカ人をも表示するが、[その「牛」という語は]二次的であることにはならない。したがって、[バルトリハリは次のように]いう。

「まさにその[「牛」という]語は、多様な性質をもつ、[つまり]すべてのものを表示する能力を有しているが、周知性(prasiddhi)の違いにもとづいて、一次あるいは二次と概念的に構想される。」

すなわち、

「「牛」という語によって喉袋などをもつかたまりが表示される(abhidhīyate)のとおなじように、鈍さなどの属性をもつヴァーヒーカ人もまた[「牛」という語によって]表示される(abhidhīyate)。」

ここでの例は「ヴァーヒーカ人は牛だ」である。バルトリハリによれば、この表現中の「牛」という語は、ヴァーヒーカ人にある鈍重さなどの属性あるいは行為に対して使用されている。しかし、それはバルトリハリにとって語の意味および語の一次・二次の区別の根拠ではない。なぜなら、語は一切の対象を表示する能力を本来有しており、実際の言語運用の際に、その能力の制限によって、ある語がある対象を表示するからである。したがって、「牛」という語がヴァーヒーカ人を表示する場合でも、ヴァーヒーカ人は「牛」という語の一次的な意味である。そして、バルトリハリにとって、語の意味および語の一次・二次の区別は、その意味の周知性(prasiddhi)の違いに求められる。

4．以上、ボージャは、クマーリラとバルトリハリの基本的な相違点をしめした。これにつづいて、おなじく*Tantravārttika*と*Vākyapadīya*を引用しながらの種々の議論をへて、ボージャは、語にとっての一次的な意味はその語自身のかたちしかない、というバルトリハリの説に立ち至る。ダルマキールティの詩節が再度引かれるのはそこにおいてである。ボージャはつぎのようにいう[8)]。

その場合、語は、［語］それ自身のかたち(svarūpa)だけを常に表示する。それこそがそ［の語］の内的(angaraṅga)な意味であり、逸脱しない［意味であり］、他の語と共通しない［意味である］。そして、それを誰もが教えられることなく理解(pratipatti)する。そして、語のそれ自身のかたちが意味に対して付託される(adhyāropyate)。「「牛」という語、それはこの塊である」［というように］。たとえば、「vṛddhiという語はāTとaiCである」(P 1.1.1 vṛddhir ādaic //)というのとおなじである。その場合、具体的な語(śruti)は、［語］それ自身の形のみに、必ず場をしめる。しかし、意味と語形の相の誤った同定(rūpaviparyāsa)だけがあるときに[9]、すべての日常言語表現がなされる。［まず最初に］特定の自身の形が聞かれる。第二段階で誤って［他の意味と］同定された［語］自身のかたちが［他の意味に対して］二次的という呼称の根拠となる。したがって［バルトリハリは］次のようにいう。

「その場合、語のそれ自身のかたち(svarūpa)は、［その語が表示する］すべての意味に結び付いている(anuṣajyate)。意味だけは誤ってとらえられる(viparyasta)けれども、具体的な語(śruti)は、それ自身のかたちにとどまる。」(VP 2.256)［この詩節につづいてPV III. 37が引用される。］

バルトリハリによれば、語は決してその語自身のかたちを逸脱することはない。これは、語を聞くときだれも決してその語自身のかたちを取り違えることはない、ということである。したがって、語自身のかたちが語の第一次的な意味であり、それ以外の意味はすべて二次的なものである。

しかしながら、日常の言語活動における意味はそのような語自身のかたちとしての意味ではない。我々の日常の言語活動においては、語自身のかたちに対して二次的であった意味が、逆に一次的な意味となるのである。このことをバルトリハリは、次のように述べている[10]。

世間では、語は意味をその相としてはたらく。一方、［文法学という］学問

の分野では、［語は、語自身のかたちという相と意味という相という］両方の相であり、それらが話者の意図によって分かたれる。

ここでバルトリハリは、文法家たちは語自身のかたちと意味の双方に注目するが、一方、日常の言語活動をおこなう世間の人々は語自身のかたちには注意をはらうことなく、語自身のかたちが付託された意味にのみもっぱら関心を向ける、ということを述べている。我々の日常の言語活動においては、語自身のかたちは、一次的な意味とはなりえず、あくまでもそれ以外の通常の意味が優位であり、そのなかで一次的な意味と二次的な意味は決定されるのである。そしてその際に基準となるのは、意味の周知性の差異なのである。

このようにみるとき、ボージャがここでPramāṇavārttika 3.37を引く理由ははっきりする。このダルマキールティの詩節は、日常の言語活動の領域内での語の意味の一次性と二次性を決定する基準を示すものなのである。そしてこのことは、この詩節中の「世間では」(loke)という語からはっきりと読み取ることができる。なんらかの対象に対して、慣用にしたがって適用される。その対象が一次的な対象であり、それを表示するために使用される語は一次的な語である。そして、その世間周知の対象との類似性にもとづいて、別の対象を語が理解させる場合、その対象は二次的であり、その語は二次的であるということになるのである。このようにみた場合、ボージャはダルマキールティの詩節をほとんどバルトリハリ説と一体のものとしてとらえていることがわかる。

5．先に見たクマーリラの説では、二次性の根拠は、個物にある属性との結び付きであった。バルトリハリの説でも、「ヴァーヒーカ人は牛だ」というような比喩的表現は、ヴァーヒーカ人と牛にあるなんらかの属性にもとづいてなされるという点では違いはない。しかし、それは、この表現における「牛」という語が二次的であることの根拠ではない。バルトリハリにとっては、世間でそういう用法がよく知られているかどうか、ということが一次・二次の区別の根拠となる。

そして、ボージャが引用するダルマキールティの詩節の内容はほぼバルトリハリに跡付けることができた。この点で、ボージャはバルトリハリ説とダルマキールティ説の一致をみとめている。更に、ボージャの詩論がバルトリハリからの大きな影響のもとになりたっていることを考えるとき、詩節そのものをバルトリハリのものと取り違えている可能性も予想されるであろう。したがって、ボージャは仏教論理学者としてのダルマキールティの説を重視しているわけではないのである。

文献および略号

JS: *Jaiminisūtra*. See See Abhyankar and Jośi (1970-78).
Paddhati. See Subramania Iyer (1966)
PV: Dharmakīrti's *Pramāṇavārttika*. See Shastri (1984).
PVV: Manorathanandin's *Pramāṇavārttikavṛtti*. See Shastri (1984)
ŚP: Bhoja's *Śṛṅgāraprakāśa*. See Raghavan (1998)
TV: Kumārila's *Tantravārttika*. See Abhyankar and Jośi (1970-78).
VP: Bhartṛhari's *Vākyapadīya*. See Rau, Subramania Iyer.

Abhyaṅkar, K. V. and G. A. Jośī, eds.
1970-76. *Mīmāṃsādarśanam*. 7 vols. Ānandāśramasaṃskṛta-granthāvaliḥ 97. Pune.

Raghavan, V., ed. 1998. *Śṛṅgāraprakāśa of Bhoja*, vol. 1. Harvard Oriental Series 53. Cambridge: Harvard University Press.

Raghavan, V. 1978 *Bhoja's Śṛṅgāraprakāśa*. 3rd. ed. Madras: Punarvasu.

Rau, W., ed. 1977 *Bhartṛharis Vākyapadīya: Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen*. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XLII, 4. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

Shastri, S. D., ed. 1984 *Pramāṇavārttika of Acharya Dharmakiriti with the Commentary Vṛtti of Acharya Manorathanandin*. Varanasi: Bauddha Bharati.

Subramania Iyer, K. A., ed
1963 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentary of Helārāja, Kāṇḍa III, Part I*. Deccan College Monograph Series 21. Poona: Deccan College.

1966 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Vṛtti and the Paddhati of Vṛṣabhadeva.* Deccon College Monograph Series 32. Poona: Deccon College.

1983 *The Vākyapadīya of Bhartṛhari, Kāṇḍa II, with the Commentary of Puṇyarāja and the ancient Vṛtti.* Delhi: Motilal Banarsidass.

注

1）ボージャとダルマキールティの関係を論じるならば、Raghavanが指摘する四箇所をすべてとりあげるのが本来であるが、本稿で取り上げる箇所以外の三箇所のうち、二箇所についてはおそらく*Nyāyamañjarī*からの間接の引用であり、ジャヤンタバッタとボージャの関係を含めて論じる必要があるという理由で、また残りの一箇所(ŚP 25)は校訂テキスト未刊(Raghavan校訂本はŚP 1-14まで既刊)という問題があるので、いずれ稿をあらためて論じることにしたい。なお本稿で取り上げるPV 3.37以外の箇所を簡単に示せば、次の通りである。まず、ŚP 5で普遍(jāti)について論じている箇所にPV 2.151cd-152abが引かれる。Raghavanも指摘するように、これはジャヤンタバッタの*Nyāyamañjarī*からの長い引用のなかに含まれるもので、ジャヤンタバッタの手によると思われる改変もそのままのかたちで残した引用である。続いてŚP 6において、語と意味の関係を論じる箇所で、語の意味は語の仮現(vivarta)であるとするバルトリハリの説に並べて、「他者(anye)」の見解としてPV 3.354(*avibhāgo 'pi budhyātmā viparyāsitadarśanaiḥ /grāhyagrāhakasaṃvittibhedavān iva lakṣyate //*)が引用される。この詩節は、戸崎(1979, 134-5)が指摘するように*Nyāyamañjarī*を含む仏教文献以外の非常に多くの論書に引用される有名なものであり、*Nyāyamañjarī*での文脈をあわせて検討する必要があると思われる。残る一つは、引用ではないが、ŚP 25において正しい認識手段(pramāṇa)について論じるうちの、類推(upamāna)についての議論の傍証として、ボージャは、ダルマキールティを名指しであげ、その説として11種の非認識(anupalabdhi)を列挙している。Raghavanが指摘するように、そこにあげられる11種の非認識は、「能遍と対立するものの認識(vyāpakaviruddhopalabdhi)」が、「対立するものの原因の認識(viruddhakāraṇopalabdhi)」となっており、また項目があげられる順序が相違しているという違いはあるものの、ほぼ*Nyāyabindu* 2.30以下にあげられているものと一致する。

2）cf. PVV on PV 3. 37: tasmād yatra viṣaye 'sadartho vācyarahito 'pi śabdo rūḍhyā vācakatvena janair niveśitaḥ saṃketitaḥ sa mukhyaḥ tatrārthe [/] tatsāmyāt <> tadviṣayasādṛśyād anyatra sa śabdaḥ skhaladvṛttir adṛḍhatayā pratyayahetuḥ <> gauṇaḥ /

3）cf. PVV on PV 3. 37: tataś ca sadarthaviṣayatvaṃ mukhyatvaṃ asadarthaviṣayatvañ

cāmukhyatvam iti mukhyagauṇalakṣaṇam apāstaṃ / saṃketavaśena niyamābhāvāt /

4) ŚP 7(556.9)na ca lakṣaṇāgauṇyor abheda iti vaktavyam / yad āha bhaṭṭaḥ / "abhidheyāvinābhūtapratītir lakṣaṇeṣyate / lakṣyamāṇaguṇair yogād vṛtter iṣṭā tu gauṇatā //" (TV, tatsiddhi, ad JS 1.4.23)ただしTV原文は次のとおり(下線部相違箇所)。TV, Tatsiddhyadhikaraṇa, ad JS 1.4.23, v. 1ab: *abhidheyāvinābhūte pravṛttir lakṣaṇeṣyate.*

5) ŚP 7(557.2)gauṇyāṃ punar agnir māṇavakaḥ, siṃho devadattaḥ, gaur bāhīkaḥ, ityādiṣu nāgnitvādyavinābhāvena māṇavakādayaḥ pratīyante / kiṃ tarhi / "*vahnitvalakṣaṇād arthād yat paiṅgalyādi gamyate / tena māṇavake buddhiḥ sādṛśyād upajāyate* //"(TV, tatsiddhi, ad JS 1.4.23)ただしTV原文は次のとおり(下線部相違箇所)。TV, Tatsiddhyadhikaraṇa, ad JS 1.4.23, v. 2a: *vahnitvalakṣitād arthād.*

6) ŚV, Upamāna, k. 18cd: bhūyovayavasāmānyayogo jātyantarasya tat // Nyāyaratnākara: jātyantarayogibhir avayavasāmānyair yo jātyantarasya yogaḥ tat sādṛśyam / (類(甲)に関係する、部分の普遍の、別の類(乙)と結び付き)

7) ŚP 9(557.8)kvacit tu rūḍhasambandheṣu kriyāguṇeṣu gośabdaḥ prayujyamāno dṛśyate, yathā jāḍyād aucchiṣṭyāt sarvasahatvān mahāśanatvād vā gaur bāhika iti / tad evaṃ sarvaśakter gośabdasyārthaprakaraṇādibhir avacchidyamānasāmarthyasya pṛthivyādāv iva bāhīke 'pi vartamānasya na gauṇatvam upapadyate / tad āha "sarvaśaktes tu tasyaiva śabdasyānekaka(dhar)maṇaḥ /
prasiddhibhedād gauṇatvaṃ mukhyatvaṃ[1] vā prakalpyate[1]//"(*Vākyapadīya* 2.253)
"tathā hi / 'yathā sāsnādimān piṇḍo gośabdenābhidhīyate /
tathā[2] jāḍyādiguṇavān bāhīko 'py abhidhīyate[2]//"(*Vākyapadīya* 2.252)
1.VP 2. 253d(Rau): mukhyatvaṃ copajāyate;(Iyer)mukhyatvaṃ copavarṇyate. 2. VP 2. 252cd: tathā sa eva gośabdo vāhīke 'pi vyavasthitaḥ. 詩節に先行する散文部分はRaghavanは同定していないが、Vṛtti on VP 2.252-3のほぼ引用。(異動箇所下線)Vṛtti on VP 2.252-3: kvacit tu rūḍhisambandheṣu kriyāguṇeṣu gośabdaḥ prayujyamāno dṛśyate / tadyathā jāḍyād aucchuṣmyāt sarvaṃsahatvān mahāśanatvād vā gaur vāhīka iti / tasya sarvaśakter gośabdasya nimittāntarād avacchidyamānasāmarthyasya prasiddhyaprasiddhibhyāṃ gauṇatvaṃ vijñāyate /

8) ŚP 9(563.14): asti [read: astu] tarhi svarūpa eva śabdo nityaṃ vartate; sa evāsyāntaraṅgo 'vyabhicārī śabdāntaraiś ca asādhāraṇo 'rthaḥ / tatra cānupadeśā pravṛttiḥ [read; pratipattiḥ] sarveṣām / svarūpaṃ tu śabdānām artheṣv adhyāropyate / yo gośabdaḥ so 'yaṃ piṇḍaḥ / tadyathā—yo vṛddhiśabdaḥ sa ādaic iti / tatra svarūpeṣv eva śrutayo nityāvaruddhāḥ / arthasvarūpayos tu rūpaviparyāsamātre sakalalokavyavahāraḥ kiryate / niyatasvarūpaṃ śrūyate; dvitīyasthānāpannaviparyāsaṃ [read: dvitīyasthāna āpannaviparyāsaṃ] hi svarūpaṃ gauṇavyapadeśe nimittatvaṃpratipadyate / tadāha "tatra svarūpaṃ śabdānāṃ

sarvārtheṣv anuṣajyate / arthamātraṃ viparyastaṃ svarūpe tu śrutiḥ sthitā //" (*Vākyapadīya* 2.256) "rūḍhyā yatrāsadartho 'pi loke śabdo niveśitaḥ / sa mukhyas tatra tatsāmyād gauṇo 'nyatra skhaladgatiḥ //" (*Pramāṇavārttika*, Pratyakṣa, k. 37) なお、この箇所も校訂者Raghavanは同定していないが、詩節に先行する散文部分は同詩節に対するVṛtti注のほぼそのままの引用である。Vṛtti注原文は次の通り(下線部相違箇所)。Vṛtti on VP 2.256: anye tv ācāryā manyante svarūpe śabdo nityaṃ vartate / sa eva tasyāntaraṅgo 'vyabhichārī śabdāntaraiś cāsādhāraṇo 'rthaḥ / tatra cānupadeśapratipattiḥ sarveṣām / rūpan tu śabdānām artheṣv adhyāropyate / yo gośabdaḥ so 'yaṃ piṇḍo 'arthaḥ / tathā yo vṛddhiśabdata ādaica iti / tatra svarūpeṣv eva śrutayo nityāvabaddhāḥ, arthasvarūpayos tu rūpaviparyāsamātreṇa sarvo lokavyavahāraḥ kriyate / nityatvāc ceyaṃ sarvaviṣayā guṇakalpanā gauṇavyapadeśe nimittatvenopādīyate ... ti yasyānāpannaviparyāsasvarūpaṃ gauṇavyapadeśanimittatvaṃ pratipadyate /

9) 形の変換(rūpaviparyāsa)についてPaddhati on VP 1.47は「語の形(śabdarūpa)をすてて意味の形(artharūpa)をとることにもとづいて。しかし、実際には、あたかも鏡が顔のかたちをとるときのように、自身のかたちをすてるのではないから、「あたかも(iva)」という語が使用されている。」(śabdarūpam apahāyārtharūpāpatteḥ, na tu paramārthataḥ svarūpabhā(hā?)nam ādarśasyeva mukharūpapratipattāv itīvaśabdopādānam /)と説明している。

10) VP 2.130: loke 'rtharūpatāṃ śabdaḥ pratipannaḥ pravartate / śāstre tūbhayarūpatvaṃ pravibhaktaṃ vivakṣayā //

Bhoja and Dharmakīrti

Yoshichika HONDA

Bhoja (11th c.), the king of Dhārā, is the author of the *Śṛṅgāraprakāśa*, a memorable work on poetics. Raghavan (1978, 741) has already pointed out that Bhoja makes reference to Dharmakīrti in four places in the *Śṛṅgāraprakāśa*. Among them, in chapters 7 and 9 of this text Bhoja cites the *Pramāṇavārttika*, Pratyakṣa, k. 37 (PV 3.37) to discuss the metaphorical use of words as in the utterance *agnir mānavakaḥ* 'The boy is fire'. In this paper I shall consider Dharmakīrti's contribution to Sanskrit poetics.